

活動体および不活動体について

千葉 萌 一 郎

О категории одушевленности и неодушевленности.

Хоитиро, Тиба

I

ロシア語のすべての名詞は、その示すところのものが人および動物であるか、あるいはそれ以外のものであるかによってそれぞれ活動体名詞、不活動体名詞に区別される。

男性名詞、中性名詞、女性名詞、つまりすべての性の名詞にとって活動体名詞、不活動体名詞の区別はその複数対格にあらわれる。活動体名詞の複数対格は複数生格に等しく、また不活動体名詞のそれは複数主格に等しい。さらにこの事実、話尾-а, -яを除く男性名詞単数対格においてあらわれる。この活動体名詞、不活動体名詞の区別は、自然科学における生物と無生物の区別にそのままあてはまる訳ではない。ロシア語における活動体、不活動体のカテゴリーは独自の展開を見せている。例えば、樹木や植物の名称(дуб, липа, растение)は不活動体であり、人の総体をあらわす名詞(народ, войско, полк)もまた不活動体である。人体および動物の体の一部分は不活動体と見なされる。ところで活動体として使用される名詞の中には、死者を意味する мертвец, мертвый покойник, 宗教的, 神話的存在の бог, чёрт, дьявол, русалка, леший, бес, 将棋の ферзь, カルタの валет, туз, козырь, 人形に類する кукла, марионетка, петрушка がある。

活動体名詞の多くは男性名詞、あるいは女性名詞である。普通中性名詞が人および動物を意味する場合は稀であるから、その活動体名詞はつぎのようなごく少数に限られている。

животное, млекопитающее, насекомое, чудище, чудовище, страшилище, дитя, существо, лицо.

活動体、不活動体の区別は意味の上からきまるのであって、名詞の形態によるものではない。このことはある場合人および動物を意味し、また他の場合にはそれ以外のものを意味する омоним によくあらわれている。

1. Собрание избрало счетчиков для подсчета голосов.

2. В квартире поставили газовый счетчик.

1. Наградить истребителя танков.

2. Сбить неприятельский истребитель.

1. Вспоминать Глухова. (人)

2. Вспоминать Глухов. (地名)

不活動体名詞が転義で活動体をあらわす場合には活動体名詞として扱われる。

1. Наконец он увидел оригинал этой замечательной картины.

2. Видели вы такого оригинала?

1. Он сел на чурбан.

2. Послал мне господь чурбана.

ところが活動体名詞が転義で不活動体をあらわす場合には、活動体名詞として扱われる傾向が強い。活動体として意識をされた名詞が意味変化をきたして不活動体をあらわしても、最初の意識はそう簡単に拭い去る訳にはいかないであろう。なぜならそれは生命をもち、動き廻り、しかも力のある存在だからである。

запускать змея, вылепить коня, читать „Рудина“, купить „Московича“. しかし сделать змей, взять „Крокодил“ も見られる。

活動体名詞が転義で常に不活動体名詞として用いられるのは魚の名称であるが、それは食品としての意味においてである。

есть кильки, шпроты. есть омары, устрицы. しかし есть цыпленка, раков. も見られる。

活動体名詞に強い力が内在している事実は、ソ連ではじめて打上げられた спутник Земли にはっきりあらわれている。Советский Союз одержал над Соединенными Штатами победу, запустив первым спутника Земли....

Алма-атинцы видели спутника невооруженным глазом. しかしながらこの спутник にはさらに後日談がある。というのはこの頃すでに主格に等しい対格の спутник があらわれていることである。В Лондоне видели спутник. ...запустить искусственный спутник. また同じ論説の中にも動謡が見られる.... Мы имеем свой спутник. ...запустить спутника-малютку (Литературная газета). これらの動謡を続けているうちに спутник Земли の不活動体が次第に優位を占め、ついには不活動体名詞として定着するにいたる。Спутник 是 искусственный спутник Земли が打上げられたことによって、新しい不活動体として位置づけされた訳である。

микроб, амеба, бактерия, инфузория, бацилла 等の下等動物もまた活動体と不活動体との間にかかなりの揺れが認められるが、現代ロシア語においては不活動体として扱う傾向が強い。Некоторые микробы (некоторых микробов) можно видеть только с помощью электронного микроскопа.

いったいこれらの傾向にはどのような意味があるのであろうか。顕微鏡下の微生物を古来の活動体の延長の上に捉えようとする意図と、それを拒否しようとする意図との闘いなのであろうか。現代ロシア語における不活動体化優位の傾向は、過去の活動体に対する訣別を意味しているのであろうか。

два, три, четыре と活動体名詞が結合した場合、規範文法によれば対格は生格に等しい。встретить двух товарищей, запрячь трех быков, зарезать четырех гусей, видеть двух коров.

しかし、話し言葉においては活動体名詞が動物をあらわし、しかも女性名詞である場合対格が主格と同形になることが多い。поймал две рыбки, купили три коровы. ついで古典にはつぎのような表現が見られる。

Платил прогоны за две лошади (Пушкин). На них он выменял борзые три собаки (Грибоедов). それはこれらの結合語が一つのまとまりとして受けとられ、その結果活動体の意識が後退したものとして理解されてもよい。しかし、これらの事実は何故に女性名詞にかかわりがあるのであろうか。

女性名詞は単数対格において固定した語尾を持ち、活動体、不活動体のカテゴリーを寄せつけない。それは人および動物を特別に扱う必要のない強い力を持っている。два,

три, четыре と結合する名詞は単数生格に、また形容詞は複数生格におかれるが、その際女性名詞の場合に限って形容詞が通常複数主格におかれるのもこれと関係があるのかも知れない。

活動体名詞が前置詞 в と共に用いられて誰々になる、ある地位、身分を得る、という意味をあらわすときは、複数主格に等しい複数対格を語尾とする古風な表現が用いられる。この場合複数対格は人の総体をあらわすものと考えられる。総体をあらわす名詞は具体からかなり抽象化されており、活動体の力はそれなりに弱められているといえよう。

выйти в люди,

наняться в няньки,

записаться в добровольцы,

годиться в матери,

произвести в офицеры,

принять в члены научного общества,

избрать в академики,

уйти в партизаны,

пойти в комбайнеры.

II

活動体、不活動体のカテゴリーがスラブ諸語においては程度の差こそあれ一様に認められるところから、その形成開始の時期については共通スラブ語時代の後期と推定されている。共通スラブ語時代の前期においては対格と主格の形態は異なっていた。それではどのような原因で活動体、不活動体のカテゴリーが発生したかという点、これまで多くの学者が述べているように、共通スラブ語時代に閉音節から開音節に移行した結果、男性名詞と中性名詞は単数において、また女性名詞と中性名詞は複数において対格と主格が同形になった。一例をあげると、-ǫ 語幹男性名詞の単数主格語尾は通常 s であったことから $\text{rod}o-s > \text{rod}b-s > \text{rod}b$ となった。またその単数対格語尾は通常 m であったことから同様に $\text{rod}o-m > \text{rod}bm > \text{rod}b$ となって主格とまったく同形になった。語順に形態素としての意味がなかった共通スラブ語においては、主語（主格）と直補語（対格）との関係が極めてあいまいにならざるを得なかった。つぎにあげる例には活動体で主格に等しい対格が使用されている。посла к нему Мстиславъ соль свой, погубиша челядинъ, повелъ остьдлати конь, налъзоша быкъ великъ (Повесть временных лет). 特に人がかかわっている場合にはその識別は絶対に必要であったに違いない。このあいまいさは生格に等しい対格を用いることによって回避された。それでは何故他の格ではなくて生格が借用されたかといえば、生格はすでに以前から部分生格として、また不定生格として対格に近い機能で使用されていたからだといえる。はじめ -ǫ 語幹男性名詞単数において生格に等しい対格が使用されるようになったが、それは識別を必要とする多くの名詞が ǫ 語幹男性名詞に集中していたことを物語っている。最初に使用されたのは人を意味する名詞でも特に人の名であって、いわゆる現代ロシア語の活動体の概念とは多少異なっていた。古代ロシア語においては、普通動物および子供を意味する名詞は不活動体として扱われている。закоупъ...погубить войскъи конь (Русская Правда), пришлить лошакъ

(Новгородские грамоты на бересте), жена дѣтищъ роди (Лаврентьевская летопись).

新らしい対格語尾はやがて人称代名詞、再帰代名詞および疑問代名詞 *кѣто* におよんだが、その時期はかなり早かったものと思われる。人称代名詞、再帰代名詞の主格と対格は形態が異なっていたのにも拘らず強い類推を受けて統一された。しかし一方古い対格語尾も同時に存在を続けていった。どのような条件のもとに古い語尾と新らしい語尾が共存していたかについて、*А.А. Шахматов* はつぎのように述べている。

(1) 物主代名詞 *свой* と結合している場合 [このような結合語は普通主語にはあり得ないので新らしい対格語尾を用いる必要がなかったのであろう]。 *тивоунъ свои держати, посади посадникъ свои.*

(2) すでに新らしい語尾を得た他の名詞に対する附語として用いられている場合。 *сына же своего Ярославъ посади Туровъ.*

(3) 対格の代りにすでに新らしい生格語尾を得た附語と共に用いられている場合。 *послалъ посолъ свои Вячеслава.*

(4) 対格の代りに新らしい生格語尾を得た補語と並べて用いられている場合。 *слати всетръникъ и медовара.*

(5) 前置詞の直後におかれて、ある特定の表現をとる場合。 [前置詞の後に主格の来ることはあり得ないので古い語尾がそのまは用いられたのであろう]。

а поиде за мужъ, въсьде на конь.

(6) 一部は他の条件のもとで、*поемъши дѣтскыи оу соудьѣ.* しかし *А.А. Шахматов* は (2) および (4) の条件についてはまた異なった見解もつけ加えている。

活動体名詞において、複数生格に等しい複数対格を古代の文献の中に見出すことは不可能であるが、双数形については極わめて容易である。何故なら双数形対格は主格と同形であったので、さして抵抗もなく類推されたものであろう。

前述のように対格＝生格語尾は最初 *-ŏ* 語幹, *-jŏ* 語幹男性名詞単数においてのみあらわれたということは、(もっともかなり以前から *-ŷ* 語幹男性名詞もまた単数において上記幹男性名詞と一致するようになっていた) つぎの事実からも説明される。すなわち, *-ā, -jā* 語幹, 子音語幹女性名詞において単数対格は主格とは異なった形を持っていたし, また *-i* 語幹女性名詞からは古代ロシア語期のはじめに人を意味する名詞, 例えば *гость* 等は早くから *-jŏ* 語幹男性名詞に移っていたので, *-i* 語幹女性名詞には女性の人を意味する名詞が殆んど見当らなかった。この故に女性名詞は複数においても, 対格＝生格の類推を蒙ることがなかった。男性名詞複数是最初すべての変化を通じて対格は主格と異なっていた。しかし, その後男性名詞複数において対格が主格と同形になったために, 人を意味する名詞の対格は新らしい対格＝生格語尾をとるようになり, これが次第に女性名詞複数におよんでいった。16世紀後半に中部ロシア語方言で書かれた *Домострой* によると, この事実はすでにかなり広くいき渡っていたようである。

вдовицъ и сиротъ покоити, жонокъ и дѣвакъ... наказуетъ.

人を意味する男性名詞単数において使用される対格＝生格語尾が, いつの頃から動物におよんでいったかについては確定することは困難である。しかし, 1649年の *уложение* には, 男性単数対格においてすべての活動体名詞の対格＝生格語尾が認められるが, 複数対格においてはこの現象はまだ見られていない。 *загонят лошади, кто пчелы вы-*

дерет, учнет птицы ловити. それから1世紀経てやっと現代における意味での活動体、不活動体のカテゴリーが安定した。ロシア語においてはこのカテゴリーが、最も徹底したと言っているであろう。

古代教会スラブ語において男の名の単数対格は常に生格に等しかった。възъръ на петра. 人を意味する男性名詞もまた同様である, имуть жениха. しかし, 人をあらわすある種の名詞 рабъ, отрокъ, доухъ, младеньць および動物の名は対格=主格の形をとる。活動体, 不活動体のカテゴリーは単数にとどまって複数まではおよばなかった。

ウクライナ語においては男性単数活動体名詞は対格=生格の語尾を, また不活動体名詞は対格=主格の語尾を持つ。しかし, 対格=生格語尾が多くの不活動体名詞に広げられているのは注目に値する, птах почистив носа. 複数形の場合対格=生格語尾は, 人を意味する男性名詞から女性名詞に, さらに中性名詞にまでおよんでいるが, 動物を意味する名詞にはこのようなことはない, пасти воли.

白ロシア語においては普通男性名詞活動体は対格=主格語尾をとるが, 時としては単数において対格=生格語尾をとり, さらにその語尾が複数に持ちこまれることがある, вол—вола—волю.

セルボクロアチヤ語における活動体は, 男性単数対格にのみあらわれる, коњ—коња, во—вола.

ブルガリヤ語では語形変化は失われたものの人の名前と, -о, -ко, -чо, -льо で終る呼名に限って対格語尾 -а, -я をとる。Иван—Ивана, Пенчо—Пенча, Радой—Радоя, дядо—дядя, глупчо—глупча. またこの形はそのまま前置詞と共に使用される, книга за Пенча Славейков.

西スラブ語方言において活動体は単に男性単数対格のみならずその生格, 与格, 位格にもあらわれる。チェッコ語およびスロバキヤ語の場合, 男性名詞単数においてつぎのような共通の特徴を持つ。(1) 活動体名詞は生格において語尾 -а を, 不活動体名詞は -и をとる。(2) 活動体名詞は与格および位格で語尾 -ovi をとるが, 不活動体名詞はこれを持たない, k bratovi, k konovi, opsovi, しかし k domu, o dome. (3) 活動体名詞対格は生格に等しく, また不活動体名詞対格は主格に等しい, vidim brata, priatel'a, chytíl raka, komára, しかし, vidím dom, stôl.

複数形を見るとチェッコ語の場合人を意味する男性名詞は, 複数主格においてのみ認められ語尾 -i, -é, -ové をとる, muž—muži, učitel—učitelé, Rus—Rusové. スロバキヤ語においては男性名詞複数対格は人を意味する名詞に限って生格に等しい, vidim bratov, priatel'ov, ľudi. また主格においては特徴的な語尾 -i, -ia, -ovia を持つ。動物を意味する名詞は普通不活動体として扱われる。

ポーランド語においては男性単数活動体名詞は生格に等しい対格語尾 -а をとるが, 不活動体名詞は主格と同形になる。複数においては人をあらわす活動体名詞は生格と等しいが, 動物をあらわす活動体名詞は対格=主格語尾をとって人と区別される。また人についてもある特定の社会的地位を意味する男性名詞は語尾 -owie をとり単に人を示す名詞とここでも区別されている。pan—panowie, profesor—profesorowie, król—królowie. しかし, sąsiad—sąsiedzi, Polak—Polacy, mieszczanin—mieszczanie.

以上活動体、不活動体のカテゴリーについて、ロシア語を考へを中心におきながらその発展の歴史と現代スラブ諸語にどのような形であらわれているかをごく簡単に眺めてみた。

参 考 文 献

АН СССР. Ин-т Русского языка. Грамматика русского языка. Т.1. М., Изд-во АН СССР, 1960.

Борковский В.И. и Кузнецов П.С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.

Булаховский Л.А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, "Радянська школа", 1958.

Горшков А.И. Старославянский язык. М., "Высшая школа", 1963.

Кондрашов Н.А. Славянские языки. М., учпедгиз, 1956.

Черных П.Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.

Шахматов А.А. Историческая морфология русского языка. М., Учпедгиз, 1957.

De Bray R. G. A. Guide to the Slavonic Languages. London, J. M. Dent & Sons, 1951.